

鹿児島県立与論高等学校

校長通信

第18号 (令和7年11月14日/校長 大倉秀心)



校訓「好学 創造 親和 不屈」

鹿児島県大島郡与論町茶花1234番地1



電話 (0997) 97-2064

FAX (0997) 97-2844

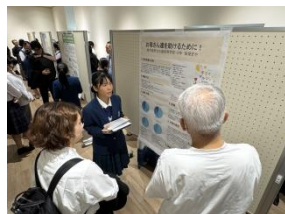


東京大学シンポジウムに参加

11月7日(金)、奄美大島で開催された東京大学医科学研究所・大気海洋研究所合同シンポジウム『プラネタリーヘルス：医科学と海洋科学研究が描く奄美発の新航路』に参加してきました。本校のサイエンスキャンプで普段からお世話になっている東京大学の先生方からお声かけいただいたので、迷わず参加を決めました。私自身も一人の講演者として参加し、『「ルーツ」を意識した探究活動と進学・就職指導』というタイトルで本校の取り組みについて講演させていただきました。内容はかねてから皆さんに訴えている、与論島だからできること・与論島でしかできないことにこだわって探究活動に取り組み、与論島のことに理解を深めることを通して自分の「ルーツ」に誇りを持って島だちしていくことをベースに講演しました。小規模校であることをものともせず、生徒の皆さんが与論島で自己のアイデンティティを確立しながら精力的に探究活動に取り組む様子を、聴衆である大学の先生方、奄美の市町村の行政関係者や民間企業の方々にお伝えするいい機会となりました。

サイエンスキャンプメンバーをはじめとする本校2年生6名も、「高校生ポスターセッション」の部に大島高校・古仁屋高校と共に参加し、探究活動の成果を発表しました。

大学の先生方からは、調査する際のアンケートの取り方、調査結果のデータの示し方や表現の仕方など、調査研究を発表する際の詳細な注意点などをアドバイスいただき、新たな視点を得ることができて刺激的な経験となったようです。今後の探究活動にさらに磨きをかけてほしいと思います。



高校生ポスターセッションの様子

プラネタリーヘルス

このシンポジウムのテーマに挙げられている「プラネタリーヘルス」という言葉、皆さんは聞いたこ

とがありますか。planet は「惑星」という意味ですが、名詞を特定する冠詞の the をつけると「地球」という意味になります。それを形容詞形にして planetary health。つまり、「地球の健康」。今、地球は健康を害しているのではないかというのが、このシンポジウムのメインテーマなのです。

では、なぜこのテーマを奄美で開催するのか。それは奄美という地域には、日本本土や沖縄ではもう失われてしまった動植物や自然環境、文化や風習、伝統芸能などがまだ残っているというのが大きいのではないかと私は思いました。講演者の中でも何名もの人が、「奄美の手つかずの自然環境」ということに言及していました。地球全体では病んできているけれど、まだ奄美は健康が保たれている。だから、健康な奄美から地球全体の病気を治していくことができないか。そんなイメージで奄美が目ざされているのだと思います。さらに、同じ奄美群島でも島によって自然環境や文化などは大きく異なる。それによその人の目から見れば魅力なのではないか。とにかく大学レベルの研究対象になるものが奄美には溢れている。だから東京大学が奄美を拠点に様々な学びを通じて地球を健康にしたいと考えたのではないかと私は思っています。

今回のシンポジウムにおける講演のタイトルを一部紹介します。

- ・『世界自然遺産の保全を通じた地域づくり』
- ・『外から見た奄美、環境文化の息づく奄美』
- ・『水資源の新たなかたちー喜界島における地下ダムの取り組み』
- ・『改正奄振法と成長戦略ビジョンの今後の展望』
- ・『奄美がなぜ異分野協働とプラネタリーヘルスの探究の場になりえるのか?』
- ・『奄美〈環境文化〉教育プログラムのこれまでとこれから』
- ・『奄美群島における「稼ぐ力」の向上に向けて』
- ・『奄美群島における海産資源マガキガイ（トビンニャ）の漁業と資源管理の現状と今後』
- ・『奄美群島の“とこぶし”と“うに”について』
- ・『遺伝子組み換えカイコによる地域新産業の創出』

- ・『アマミノクロウサギミュージアム Quru Guru の施設紹介と取り組みについて』
- ・『沖縄・奄美の生きている砂：有孔虫』
- ・『危険だけど面白いハブの話』
- ・『マラリア：コロナ禍で悪化した感染症と奄美での研究』
- ・『奄美野生動物医学センターにおける保全活動と将来展望』
- ・『「海と希望の学校 in 奄美」の取り組み』
- ・『地球温暖化と島のアイデンティティー』

中でも特に印象的だったのは、奄美野生動物医学センターの獣医師の先生が、自分を含め奄美にいる獣医師はIターン組（島外出身者）ばかりで、地元の人はいないので、是非、地元の高校生から獣医師を目指す人が出てほしいと訴えていたことです。どんな職種でも、地元の人材が存在することは地域を持続発展させるためには必要だということです。

また、東大副学長・矢口祐人先生による講演『地球温暖化と島のアイデンティティー』では、温暖化により島の水没に直面しているツバルの人々が、万一、オーストラリアなどの他の地域に移住せざるを得なくなったときに、島民の人たちが最も大切にしなければならないと思っていることに着目していました。それは、

We must remember where we come from.

「自分たちがどこの出身なのかを忘れてはならない」。島が海に沈み、物理的に住める土地が消滅してしまったときに、ツバルが国であるためには島民の心の中にある「私はツバル国民」というアイデンティティーが絶対に必要だということです。これは私が常日頃から皆さんに訴えている、「ルーツに誇りを持て」ということと全く共通することです。本校が進めている取り組みが間違いではないことを実感できた貴重なシンポジウムとなりました。

鹿児島大学シンポジウムを聴講

東大のシンポジウムに先立ち、10月25日（土）に奄美大島にて開催された鹿児島大学奄美群島拠点シンポジウム『奄美群島の更なる発展に向けた地域連携と人材育成』を本校の先生方とオンラインで聴講しました。

パネルディスカッションではパネリストとして、

与論町総務企画課長の龍野勝志さんが登壇し、“人こそが宝”という思いのもと、「与論島人づくり構想（通称：与論島アカデミー構想）」について紹介されていました。高校生段階では、「町内または町外で学び、自分の生き方を見つけ」、大学等に進んだ後は、「地域課題解決、振興に寄与する活動に挑戦」する人材を育成することを目指しているということです。小中学校時代からの「ゆんぬ学」を高校で完成させて、上級学校で郷里・与論島の発展を願いながら生きる先輩方はすでに出てきています。皆さんもそのような先輩に続けるように12月の発表会に向けて頑張ってください。

ちなみにこのパネルディスカッションのファシリテーターを務めていたのは、本校の「価値創造ゼミ」を指導してくださっている鹿児島大学南九州・南西諸島域イノベーションセンター長の藤枝繁先生でした。このような先生から日常的に指導を受けることができる本校の生徒達は本当に幸せだと思います。

限界集落と先祖崇拜

もう一人このシンポジウムで印象に残ったのが、鹿児島大学法文学部4年の要田のかさんでした。彼女は『限界集落を再び人が集まる集落にするまで～地元×観光×自然～』と題して講演しました。

彼女の地元である奄美大島の管鈍地区は超高齢化社会の限界集落になっているそうです。彼女が幼いときは盆には島外に出た親戚・縁者がたくさん帰省して盆行事も盛大に行われていたが、今ではそれも難しくなってきた。でも、このようなご先祖様を大切にすることはなんとか残したい。廃校となった小学校が草ぼうぼうになっている様子などを見ると、衰退していく集落の姿と重なって、胸がぎゅっと締め付けられるほど辛いということをお話していました。今後は地元住民を元気にし、島外に出た人が帰ってこられる、観光客や移住者の人が楽しくワクワクするようなことを考えていきたいと話していました。

私は一生懸命訴えかけるように話す彼女を見て、思わず涙がこみ上げてきました。やはり、「本気で何とかしたい」と思っている人の言葉には魂が宿ります。与論高校の皆さんにも聞かせるべきだったと後悔が残るシンポジウムとなりました。